

。ときめきリーフノベル

神様になった婆ちゃん

文・高安義郎
絵・芝 章一

― 良太の日記から ―

三人兄弟の末っ子だった僕を可愛がってくれた曾祖母は、僕（良太）が小学生になった年の夏に他界した。享年九十五歳だった。

祖父は早死にで僕の父はこの曾祖母に育てられたのだ。

曾祖母が倒れたのは亡くなる一月ほど前だった。

病院に担ぎ込まれ一時は持ち直したが、僕が学校帰りに見舞うと、

「おや、浩一かい。学校は終わったのかい」と聞いた。浩一というのは僕の父の名だ。

「婆ちゃん、ふざけてんの？」

付き添いをしていた母に聞いた。母は、「婆ちゃんは神様になったんかな」と笑いながら言った。

冗談を言っているのだろうと思っただけは、

「神様になったんか 婆ちゃん。すごいじゃん」

意味もなく言った。

すると買い物の手伝いから帰っていた五つ上の兄が、

「バカか、このちび。ここが神様になったんだよ」

そう言って僕の頭を小突き、帰りがけに一言、また『バアカ』と言って出て行った。頭が神様になったとは何なのだろう。

神様になったのなら一つ試してみようかとその時思った。

ポケットには五百円玉があった。先日見舞いに来た叔父がくれたものだった。その五百円を新聞紙の切れ端に包むと、そと曾祖母の枕の下に忍ばせ、千円を増やして下さいと念じた。

翌日だった。学校帰りに曾祖母を見舞うと、母は洗濯物を干しに外に出ていた。

そのすきに曾祖母の枕の下に手を入れると、一枚の封筒が出てきた。

新聞紙ではない。恐る恐る封筒を開くと、何と千円札が二枚入っていた。

本当に増やしてくれたのだろうか。

「婆ちゃん、増やしてくれたんか」

僕は小声で聞いたが、目を閉じたまま返事はないが、心なしか頷いたように思えた。母が病室に帰ってきた。僕は何か食わぬ顔で空腹を訴えた。

その時近所の人が数人見舞いに来た。「うちに帰って姉ちゃんにムスビでも作って貰いたい」

そう言って追い返された。

「小学生になったのに、挨拶一つできなくて」

そんな母の声が後ろから追いかけてきた。

家に帰ると嫁に行ったばかりの姉が来ていてムスビを作ってくれた。食べながら、

「姉ちゃん、神様って本当にいるのかなあ」と聞いてみた。すると姉は、

「いると思えばいるだろうし、いないと思えばいないだよ」

訳の分からない返事をした。

「婆ちゃんは神様になったらいい」というと、

「バカだねえ良太は。それよりか宿題があるんじゃないかい」

そう言って相手にしてくれなかった。

その夜、母は病院から帰って来たが、お金のことは何も言っていないかった。

僕は後ろめたさと不気味さのあるその金は使うことも出来ず、引き出しの奥にしまい込んだ。

そんな事があって半月後、曾祖母は亡くなった。

母と叔母が台所の隅で泣いていたのを覚えている。

父の祖母なのになぜ母が悲しがるのかわからなかった。

通夜の夜。お坊さんが帰った後で、三人の叔父や叔母のご主人達が酒を飲んでた。飲みながら父が言った。

「歳には不足はねえけども。いい婆ちゃんだったよ。」

嫁を大事にしてくれて。

そうだ。俺達孫四人に残していった物があるんだ。これだけだよ」

そう言って父は巾着袋を取り出した。その中からはそれぞれ四人の孫達の名前を書いた茶封筒が四つ出てきた。

封筒の表には「二千両」と書かれていた。中には千円札が二枚ずつ入っていた。

病院で母に作らせた物らしい。

「二千両か。婆ちゃんには大金に思っただろうなあ。記念だから貰って行くよ」

叔父達は自分の名の書かれた封筒を受け取った。僕が持っている二千円はこの中の一つだったのかも知れない。

一つ足りなかったらどうしようかと不安がよぎったが、四人は皆受け取ったようだった。

やはりあれは僕にくれた物だと思っただけだ。

「婆ちゃん有り難う」と心の中で礼を言った。

その時部屋に夜蟬が舞い込んで来てジジと鳴いた。

「婆ちゃんの生まれ変わりで。」

逃がしてやれ」

父が言った。

神様になった婆ちゃんは、今度は蟬に変身したんだと、その時思った。

あの時の二千円は三十年経った今も机の奥に眠っている。

